

永井荷風隨筆名作選

目次

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・五

I 荷風随筆の小品―情景描写の美しさ、細やかさ・・・ 一一

鐘の声（一一） 蟲の聲（一八） 花より雨に（二八）

雪の日（三九） 深川の散歩（五八） 深川の唄（七八）

町中の月（一〇七） 放水路（一一六） 葛飾土産（一三三）

水の流れ（一六一） 里の今昔（一六七）

元八まん（一八八） 向島（二〇〇） 寺じまの記（二〇六）

伝通院（二二六） 霊廟（二四三）

II 散歩随筆の名作―『日和下駄』・・・・・・・・二六二

第十一	夕陽	附富士眺望	三九九
第十	坂		三九〇
第九	崖		三七四
第八	閑地		三四九
第七	路地		三四二
第六	水	附渡船	三一九
第五	寺		三〇三
第四	地囟		二九五
第三	樹		二八四
第二	淫祠		二八一
第一	日和下駄		二六四
序			二六二

はじめに

永井荷風は、一流の知識人の父母、上流の名家に生まれながらも、その生き方に反発し続けて、自らの境地を切り拓いてきました。もともと、尋常小中学時代は、母親の影響で、芝居や歌舞伎に親しみ、病気で休学中には『水滸伝』や『八犬伝』『東海道中膝栗毛』などの伝奇小説や江戸戯作文学に読みふけたといわれ、これらが荷風の文学のベースになったともいわれています。明治末年、父親の意向で実学を学ぶべく、渡米さらに渡仏しますが、その間にフランス文化への傾倒を深めました。外遊から帰国して、『あめりか物語』に続き、『ふらんす物語』を發表しますが、そこでの荷風の関心は、エッフェル塔などにはなく、市井の人々や人間くさい街並み、文化にありました。続いて、中編の『すみだ川』や短編『深川の唄』な

どを発表しますが、そこには、欧米渡航前にまだ存在していた江戸情緒への懐旧に満ちています。深川はその象徴でした。たとえば

『深川の唄』は、こういう内容です。

・・・十二月某日、行く当てもなく築地両国行きの市電に乗った。次第に混んできて、喧騒に満ちる。新富町を過ぎたところで停電で電車が止まった。下車した往来で、不揃いの西洋造りや電線、ペンキ塗り広告に憤然とする。ふと、深川に行こうと思った。日本を去るまで、深川はあらゆる自分の趣味、恍惚、悲しみ、悦びの感激を満足させてくれた所だった。自分の心はたちまち十年前の懐かしい昔に立ち返った。ふと見ると、西の大空一帯には、沈む夕日が生血の滴る如く燃えている。自分は、いつまでも、暮れゆくこの深川の夕日を浴び、盲人が歌う端唄を聴いていたと思つた・・・。

荷風の作品は、川面、夕日、月、空などの自然描写の美しさが際

立っています。『すみだ川』などの中編もそうですし、短編随筆にもそこかしこに見られ、それが荷風文学の大きな魅力となつています。

この書籍では、それらの情景描写の美しさや細やかさ、荷風にとつての旧き良き時代への懐旧の情緒が滲み出している随筆を選んで一冊にまとめてみました。フランスからの帰朝直後に書かれたもの、フランス文学、評論を講じた慶応義塾大学教授退官後に、私生活も破綻して新たな境地を開いていく中で書かれたものが中心です。荷風は、ちやうど昭和になつた頃から、銀座にさかんに出入りする一方で、江東区荒川放水路の新開地や浅草の歓楽街、玉の井の私娼街、そして浅草などを寸暇を惜しんで歩き回つた時の随筆が中心です。向島、本所、亀戸、深川、葛飾、浅草、山の手台地、そして市川と散策は広範囲にわたりました。それらを描いた随筆の中から、情景

描写の美しさ、細やかさが特に優れたものを選んでいきます。後半は、散歩随筆の名作といわれる『日和下駄』を全編収録しています。慶應義塾大教授としてフランスの語学や文学を教えながらも、江戸の面影を求めて先哲の墓や遊里など散歩を重ねた際の作品です。

なお、銀座も荷風の散策の主たる対象でした。それについては、この「大活字本シリーズ」で別途、『追憶の銀座―文士七人の回想』に収録した『銀座』や、『濯東綺譚』の中の「作後贅言」などの作品がありますので、それらを併せてお読みいただければ幸いです。

しみじみ朗読文庫

※ 出典について

本書に収録した作品は、インターネット図書館の「青空文庫」に拠っています。「青空文庫」を制作したのはボランティアの皆さんです。なお、表記は、出典のままとし、全体的な表記の統一はしておりませんのでご了承下さい。

•

I
荷風随筆の小品—情景描写の美しさ、細やかさ

鐘の聲

住みふるした麻布あさぶの家の二階いえには、どうかすると、鐘の聲の聞えてくることがある。

鐘の聲は遠過ぎもせず、また近すぎもしない。何か物を考えている時でもそのために妨げ乱されるようなことはない。そのまま考ねに沈みながら、静に聴きいていられる音色ねいろである。また何事をも考えず、つかれてぼんやりしている時には、それがためになお更ぼんやり、

夢でも見ているような心持になる。西洋の詩にいう揺籃ゆりかごの歌のよう
な、心持のいい柔な響である。

わたくしは響のわたって来る方向から推測して芝山内の鐘しばさんないだとき
めている。

むかし芝の鐘は切通きりとおしにあつたそうであるが、今はその処ところには見
えない。今の鐘は増上寺ぞうじょうじの境内の、どの辺から撞き出されるのか。
わたくしはこれを知らない。

わたくしは今の家にはもう二十年近く住んでいる。始めて引越し
て来たころには、近処がけしたの崖下には、茅葺屋根かやぶきの家が残っていて、
昼中ひるなかもにわとり鶏が鳴いていたほどであつたから、鐘かねの音も今日よりは、も
っと度々聞えていたはずである。しかしいくら思返して見ても、そ
の時分鐘の音に耳をすませて、物思いに耽ふけつたような記憶がない。
十年前には鐘の音に耳を澄ますほど、老ふけこ込んでしまわなかつた故で

もあろう。

然るに震災の後、いつからともなく鐘の音は、むかし覚えたことのない響を伝えて来るようになった。昨日聞いた時のように、今日もまた聞きたいものと、それとなく心待ちに待ちかまえるような事さえあるようになって来たのである。

鐘は昼夜を問わず、時の来るごとに撞きだされるのは言うまでもない。しかし車の響、風の音、人の声、ラヂオ、飛行機、蓄音器、さまざまの物音に遮られて、滅多にわたくしの耳には達しない。

わたくしの家は崖の上に立っている。裏窓から西北の方に山王と氷川の森が見えるので、冬の中西北の富士おろしが吹きつづく、崖の竹藪や庭の樹が物すごく騒ぎ立てる。窓の戸のみならず家屋を揺り動かすこともある。季節と共に風の向も変って、春から夏になると、鄰近処の家の戸や窓があげ放されるので、東南から吹いて来る

風につれ、四方に湧起るラヂオの響は、朝早くから夜も初更しよこうに至る頃まで、わたくしの家を包囲する。これがために鐘かねの声は一時全く忘れられてしまったようになるが、する中うちに、また突然何かの拍子にわたくしを驚すのである。

この年月としつきの経験で、鐘の聲が最もわたくしを喜ばすのは、二、三日荒れに荒れた木枯こがらしが、短い冬の日のあわただしく暮れると共に、ぱったり吹きやんで、寒い夜が一層寒く、一層静になったように思われる時、つけたばかりの燈火の下もとに、独り夕餉ゆうげの箸はしを取上げる途端とたん、コーンとはつきり最初の一撞ひとつきが耳元みみもとにきこえてくる時である。驚いて箸を持ったまま、思わず音のする彼方かなたを見返ると、底びかりのする神秘的な夜の空に、宵よいの明星みようじょうのかげが、たった一ツさびし気に浮ういているのが見える。枯れた樹の梢に三日月のかかっているのを見ることもある。

やがて日の長くなることが、やや際立きわって知られる暮れがた。昼は既に尽うきながら、まだ夜にはなりきらない頃、読むことにも書くことにも倦うみ果あてて、これから燈火あかりのつく夜になつても、何をしようという目当めあも楽しみもないというような時、ふと耳にする鐘かねの音は、机ひじに頬杖ひじをつく肱ひじのしびれにさえ心付かぬほど、埒らちもないむかししの思出しに人をいざなうことがある。死んだ友達の遺著いしなど、あわてて取出し、夜のふけわたるまで読み耽しけるのも、こんな時である。若葉わかしの茂りに庭のみならず、家の窓もまた薄暗うすく、殊なに糠雨ぬかあめの雫しずくが葉末はから音もなく滴したる昼過したぎ。いつもより一層遠く柔なに聞えて来る鐘かねの声は、鈴木春信すずきはるのぶの古き版画の色と線とから感じられるような、疲労と倦怠ひとよを思わせるが、これに反して秋も末近く、一宵ひとよごとにその力を増すような西風くつげんに、とぎれて聞える鐘かねの声は屈原くつげんが『楚辞そじ』にもたとえたい。

昭和七年の夏よりこの方、世のありさまの変わるにつれて、鐘の声もまたわたくしには明治の世にはおぼえた事のない響を伝えるようになった。それは忍辱にんにくと諦悟ていごの道を説く静なささやきである。

西行も、芭蕉も、ピエール・ロチも、ラフカヂオ・ハアンも、各おのおのその生涯の或時代において、この響、この声、この囁ささやきに、深く心を澄まし耳を傾けた。しかし歴史はいまだかつて、如何なる人の伝記についても、殷々いんいんたる鐘の聲が奮闘勇躍の氣勢を揚げさせたことを説いていない。時勢の変転して行く不可解の力は、天変地妖の力にも優っている。仏教の形式と、仏僧の生活とは既に變じて、芭蕉やハアン等が仏寺の鐘を聴いた時の如くではない。僧が夜半に起きて鐘をつく習慣さえ、いつまで昔のままにつづくものであろう。

たまたま鐘の声を耳にする時、わたくしは何の理由もなく、むかしの人々と同じような心持で、鐘の声を聴く最後の一人ではないか

というような心細い気がしてならない……。

昭和十一年三月